

石

平山千代子



私の家に門から玄関まで、ずっと石が敷いてある。

私は、始めは土をふんで歩いた。その頃からこの石とはお馴染みである。何度この石につまづいて、口惜しい思ひをしただらう。

「こんな邪魔な石！ どけちやえはいゝのに……」と、けとばして見たことも何度かあつた。

この憎まれたり、けとばされたりした、沢山の石の中に、私の好きな石が二つある。一つは玄関近くにあつて、少し青味がかつた……丁度、青磁のやうな色をした、大きい石で、そのきれいな色、なめらかなつやが私の心を牽いた。

もう一つは丁度、門と玄関との中間に位し、割合に四角く、やはり青ツぽい色をしてゐる。

春はつゝじの花びらをうけ、夏は水引草の小さい花の赤さと調和して、尚更、美しく私の心をとらへた。

私にはこれらの石が、とてもきれいに見えたのである。毎朝の往復にもこの石だけは、わざ／＼よけて通つた。この石の青さを汚すのが惜しい様な気が

して、ふむのにしのびなかつたのである。

夏になると、水まきの時などよくたわい、でこの石をみがいて、その青さに一種の驚きに近い喜びをおぼえた。ジャンケンとびをする時も、この石だけはふむのが惜しくて、内しよでよけたものである。少し大きくなつてからは、この石をとびこした。が、困る事には、玄関に近い石の隣りがやはり二番目に私の好きな石なのである。どつちもふみたくない。

早く二つとも、跳びこせる様に大きくなりたいたと、何度か練習したのだが、今では二つ位はヘイチヤラで、跳ばうと思へば三つでもとべる様になつた。

かうして、かつては私に可愛いがられたこの石も、今ではちつとも他の石と変らなくなつてゐる。

底本：「みの 美しいものになら」四季社

1954（昭和 29）年 3 月 30 日初版発行

1954（昭和 29）年 4 月 15 日再版発行

入力：鈴木厚司

校正：林 幸雄

2008 年 2 月 27 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。